

# 洛東の丘

～校長室から 洛東生の皆さんへ～  
令和2年5月8日(金)第4号

## 花鳥風月 (カチョウフウゲツ)

花や鳥を見て楽しみ、風や月の絵や詩を作るように、自然の景色を題材として絵や詩を創作して楽しむこと

### ◆学校再開に向けて◆

臨時休業が延長となりました。繰り返しになりますが、皆さんの心身の状況や学習の遅れを心配しています。それぞれに出されている課題にしっかりと取り組み、質問や不安なことがあれば、登校可能日を活用してくださいね。登校が無理な場合は、まず電話で相談してみてください。

学校は、今のところ6月の再開に向けて準備を進めています。すぐに通常通りの学校生活を取り戻せるかどうかは今後の状況次第ですので、「通常登校」か「分散登校（学年やクラスを曜日や午前午後に分けて登校）」の両方を想定して考えています。

いずれにしても休業中の課題について、その成果を評価していかなければなりません。学校再開後にテストなどで自学自習の成果を発揮してもらいますので、心づもりをして学習に励んでください。

## 頭の体操

答えは次号で！



前号の答え

**「互いの馬を入れ替えてみて」**

勝利条件は、「自分の馬が後でゴールすること」。

言いかえると「相手の馬が先にゴールすること」です。

お互いの馬に乗りかえてレースをすれば、その馬で先にゴールした方が勝ちになるので、2人は全速力でゴールに向かったわけです。

- 1 ボールペンと消しゴムの値段は合わせて110円です。
- 2 ボールペンは消しゴムより100円高いです。

消しゴムの値段はいくらでしょう？



## 洛東写真館

校門横のツツジがきれいです！



皆さんに送る課題をこのカゴの中に重量ごとにまとめます。  
課題は12日に発送します。

## 一枚の履歴書

昔の教え子A君の話です。彼は私と6つしか違いませんので、そこそこいい年になっています。A君は5人きょうだいの長男として生まれました。母親が女手ひとつで切り盛りしているA君の家庭は決して裕福ではありませんでした。しかし、彼は運動能力が高く誰からも愛される人柄で、勉強の方はからっきしで卒業するのがやっとでしたが、野球部のキャプテンとして夏の大会ではチームをベスト8まで導きました。しかし、卒業後の彼がいったいどこで何をしているのか誰も知らず、しばらくは「Aは今頃どこで何をしているんやろなあ・・・」と話題に上がっていましたが、そのうち誰からも彼の名前が出てこなくなりました。

私が31歳の冬のある日、彼が卒業して6年でしょうか。生徒指導部の部屋で仕事をしていると、「失礼します。久米川先生おいでになりますか？」と威勢の良い声が入口から聞こえました。私が振り返ると、ロングコートにストールをまとった笑顔の紳士が立っています。見えるほど立派になっていましたが、それは間違いなくA君でした。彼は表に運転手付きのベンツで乗り付け、車内にそれは綺麗な奥さんを伴っていました。

その夜彼と食事をし、私は彼の話に釘付けになるのです。

貧しい家庭の長男として、まず一人でも食いぶちを減らそうと彼は家を出て東京へ行きました。所持品は小さなバッグに少しの小遣い、そして一枚の履歴書です。まさしく裸一貫で花の都 大東京へ飛んでいったのです。履歴書を片手に片っ端から会社やお店を訪ね、雇ってもらえないか交渉。次の日もまた次の日も・・・。なけなしの小遣いも底をつき、ふらふらの状態である建設会社を訪ね、履歴書を差し出しながら「・・・何か食わせてもらえませんか・・・」と頼んだと言います。社長がとってくれた出前の丼をむさぼるように平らげ、「絶対にご恩返しをします。」と頭を下げました。事情を聴いてくれた社長が、「見習いで良ければうちで雇ってやる。」とまさかの一言。そこから我武者羅に働いて働いて、3年後に独立。その辺のワルをつかまえて社員にし、建設関係の株式会社を設立したA君は、運転手付きのベンツで母校を訪れ私の前に現れたのです。

教員の仕事は生徒を「教える・導く」ことですが、こうして成長する教え子の姿に感動することが少なからずあります。自分の力で人との出会いを築き、道を拓いていったA君の生き様に、強く感動を覚えるとともに多くのことを学ばせてもらったのは言うまでもありません。

### ♡一人旅の夜に・・・♡

バイクで結構一人旅をします。一昨年、四国は愛媛の松山へ行ったときのこと。

宿でひとつ風呂浴び、居酒屋を探して街をウロウロしていました。目に飛び込んできたのが「小樽の女(ひと)」という暖簾のかかったお店。「へえ・・・四国なのに小樽・・・気になるな・・・」と吸い込まれるように中へ。

写真のお二人に温かく迎えられ、一杯。料理も美味しくいただき、一人旅の男を優しく包んでくれるお二人に会話も弾みます。

しかし、気になることが。失礼ながら高齢のお二人に似合わず、店内には所狭しとEXILE関係のポスターが。

「EXILE、このお店に来たことあるんですか？」



と、尋ねると・・・

女将さんが静かに一言。  
「白濱亜嵐ているでしょ。」

私たちの孫なんよ。」

「・・・え・・・」

ミーハーな私はこうしてスリーショットをお願いしました。